

授業科目名	担当教員名	授業実施日	※
海洋を化学する	上村 大輔	6月24日(火)	118
学生番号	学部・学科	学年	氏名
03080016-1	法学部	1年	今村 友穂

先日家でテレビを見ていたら、フグを獲って食べている場面があった。フグに毒があることが皆に知られるようになる前は、きっと何人もの人がフグで命を落としたのだと思う。一人だけだと思った。フグ以外にも、今回の講義で紹介されたように海洋生物には毒をもっとものが多い。化学が発達する以前の古代の人たちはどうやってそのような毒から身を守りつつ、食生活を送っていたのだろうか。

モルヒネがケシの花を原料としていたり、漢方薬が存在するように、植物が薬の原料となっていることは知っていた。しかし海洋生物が持つ物質も化学的に研究して製薬に利用するなんてとても驚いた。クロイソカイメンから発見されたハリコンドシンBという物質ががんの特効薬として期待がかけられているというのだ。ハリコンドシンBが骨髄がん育剤として働くという発見事件なかなかできるものではない。それなのに私にはさっぱり分からない複雑な化学式で表されるハリコンドシンBを化学合成しようという化学者は本当に多い。生物が持つ毒は、身を守るためにその動物自身が作り出していると考えていた。

だからフグの毒であるテトロドトキシンとツムギハゼなどの他の生物も持つと講義で聞いて不思議に感じた。数種類の生物が同じ毒を持つという理由はバクテリアがその毒を生産し、それを食べた生物の体内に蓄積されるように考えられたが、まだにはっきり分からないということだった。

これだけ自然科学が発展した時代に生物の毒がどのように作られるかが解明されていないことにびっくりした。人間はもう研究することがあまのうくらいに生物のことを知ろうとしていると思っていたが全く違ったのだ。人間が自然から学ぶことがまだまだたくさんあって、これからもどんどん新しい発見が生まれていくのだろう。もしかしたら、まだ特効薬のない難病で苦しむ人たちの希望の光となる物質が見つかるかもしれない。天然物有機化学の分野のさらなる発展を見守りたい。